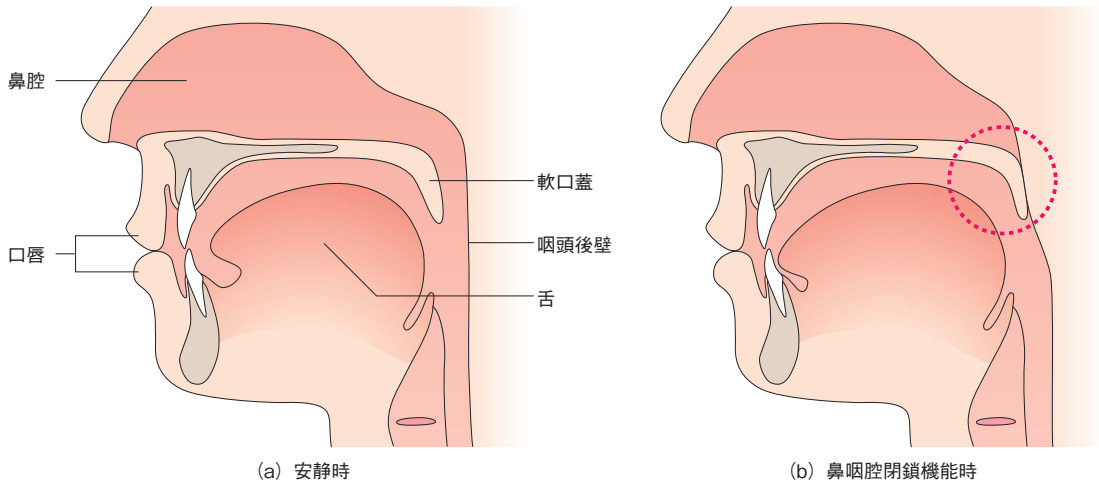


## ▶ 鼻咽腔閉鎖機能

- **図2** は、呼吸をしているとき(a)と声を出したとき(b)の軟口蓋の動きを示したものである。ことばを発したり、食べたりするときは、筋肉である上顎のやわらかい部分(軟口蓋)と、のどの奥の壁(咽頭後壁)が接して、口と鼻を咽頭後壁の部分で遮断する働きが必要であり、このことを鼻咽腔閉鎖機能という。

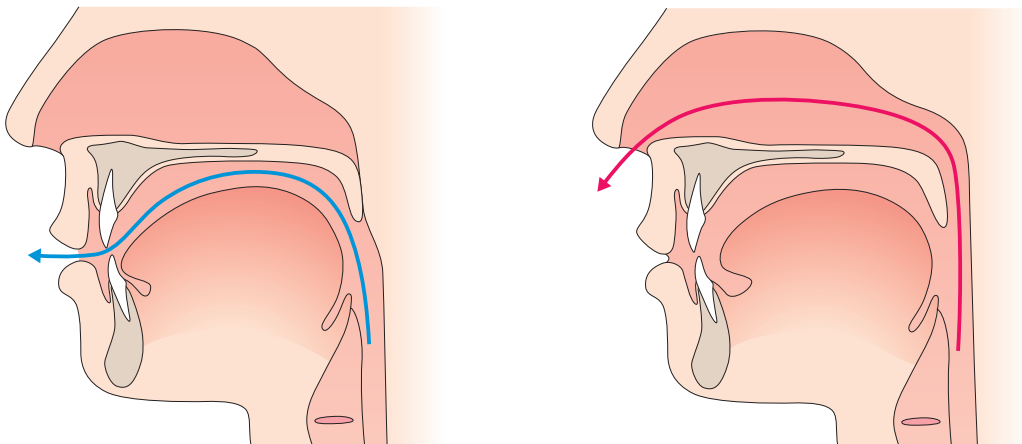


**図2** 鼻咽腔閉鎖機能時の軟口蓋の動き

a: 鼻で呼吸をしている時は、軟口蓋は挙上しない。

b: 声を出したり、食べたりしている時は、軟口蓋はのどの奥の壁(咽頭後壁)に接して、口と鼻を遮断する。

- 鼻咽腔閉鎖機能が良好な場合は、**図3** のように口から呼気を出しながら発声するが、鼻咽腔閉鎖機能が不全の場合は、**図4** のように、過度に声が鼻腔共鳴することにより、鼻に抜けるような弱い音になる。また、二次的に鼻咽腔閉鎖機能不全に関連する構音障害を示しやすい。



**図3** 鼻咽腔閉鎖良好例

鼻咽腔が閉鎖され口腔から呼気を放出している。

**図4** 鼻咽腔閉鎖不全例

鼻咽腔が閉鎖されず鼻腔から呼気を放出している。

## ▶ 構音

- 口蓋裂にみられる構音障害には、鼻咽腔閉鎖機能不全と関連するものと関連が少ないものがある。関連するものの代表的な誤りは声門破裂音、関連が少ないものの代表的な誤りは口蓋化構音がある。

### ① 声門破裂音

- 鼻咽腔閉鎖機能不全の代償構音としてみられることが多く、口腔内で産出するための口腔内圧が高められないため、声門で産生された音で、喉頭に力を入れて母音(あいうえお)を区切りながら発声したような音の誤りである。

### ② 口蓋化構音 図5

- 歯茎音の構音位置が後方に移動し、舌背中央部と口蓋で音を産生する音で、聴覚的印象としては、た行音がか行音に近い音の誤りである。

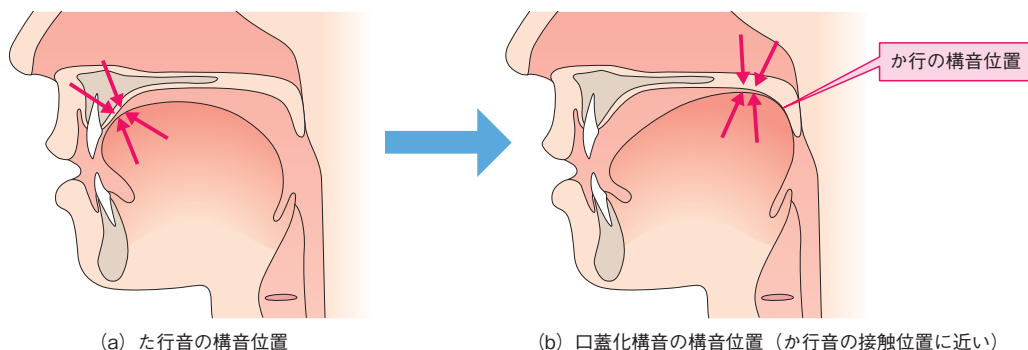


図5 鼻咽腔閉鎖機能不全に関連の少ない構音障害（口蓋化構音）

## ▶ 言語発達

- 乳児期の言語表出の発達が言語理解に比べて遅れる傾向があるが、知的発達や聴力に問題のない場合、3歳ごろまでに追いつくことが多い 表1。

表1 定型発達児と口蓋裂児の言語発達の比較

	始語 まんま	2語文 ジュース飲む	3語文 ○○ちゃん ジュース飲む	多語文 ママと○○ちゃんと ジュース飲む
定型発達児	1歳ごろ	1歳9か月ごろ	2歳6か月ごろ	3歳ごろ
口蓋裂児	1歳すぎ	2歳1か月ごろ	2歳9か月ごろ	3歳ごろ

3. 構音障害

⑧機能性構音障害

機能性構音障害とは？

A

- 機能性構音障害とは、構音障害の原因・要因(例：聴覚障害、口蓋裂、脳性麻痺、知的能力障害など)が明らかでない構音の障害を指す。
- 米国精神医学会の「精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM-5-TR)」<sup>1)</sup>のなかでは、「speech sound disorder(語音症)」が機能性構音障害に相当する。語音症は、構音の障害と音韻の障害の両方を含む診断名であり、近年はわが国でも機能性構音障害に構音の障害と音韻の障害を含んで定義されている文献が多い<sup>2,3)</sup>。
- 機能性構音障害は、小児の言語障害のなかで多くみられるが、成人でもみられる。発達途上にみられる構音の誤りが固定化・習慣化し自然改善しない場合や、日本語の習得途上では通常みられない、特異な構音操作の誤りなどがある。
- 評価は、保護者や当事者からの情報収集と、構音検査、構音障害の原因・要因に関する検査により行う。訓練の適応がある場合は、構音操作や音、音節から、単語、句・文、会話など徐々に大きい言語単位へと系統的に構音訓練を実施する。

## 小児の構音発達

- 日本語の構音獲得には順序性があり、通常、[s] [dz] [ts] [r] (サ行音、ザ行音、「ツ」、ラ行音)などの獲得が遅い子音を除くと、4歳頃までには日本語の多くの子音を獲得する。獲得が遅い子音も6、7歳頃までには自然に習得される(表1)。

表1 構音習得時期

年齢の目安	ほぼ明瞭な音として構音できる子音*	ポイント
2歳代	p, b, m, φ, w, j	両唇音、鼻音、接近音は早期に獲得する
3～4歳代	t, d, k, g, n, ɕ, tɕ, dz, h	4歳頃までには一部の音を除き構音可能となる
5歳代	s, c, k <sup>j</sup> , g <sup>j</sup>	歯茎摩擦音・破擦音・弾き音、後続母音が[i]のときの軟口蓋音(日本語のキ、ギ)は獲得が遅い
6歳代	ts, dz, r	

\*音声表記を示す。[ ]は省略した。

## 構音の誤り

### ▶ 発達途上の構音の誤り

- 未習得の子音を、既に習得している構音位置や構音方法が目標音に近い音で代用する誤り方を指す (図1)。
- 発達が進むにつれて自然改善することが多い誤りであるが、誤りが固定化し、習得年齢を過ぎても自然改善しない場合 (図2) は、訓練を実施する。

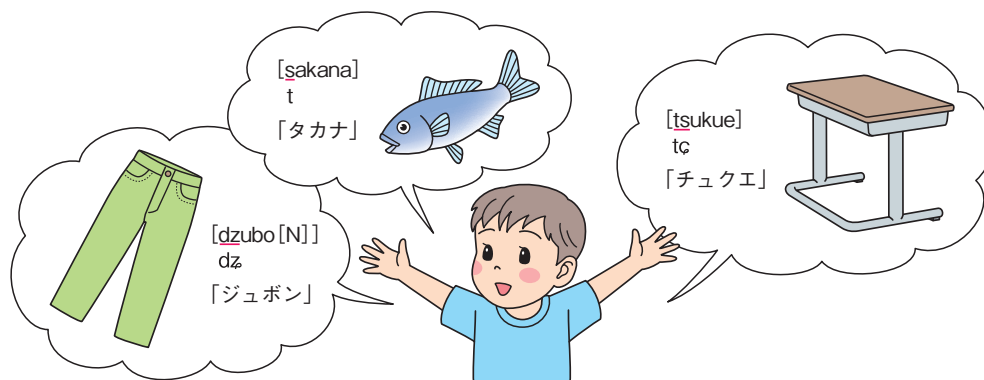


図1 発達途上の構音の誤りの例

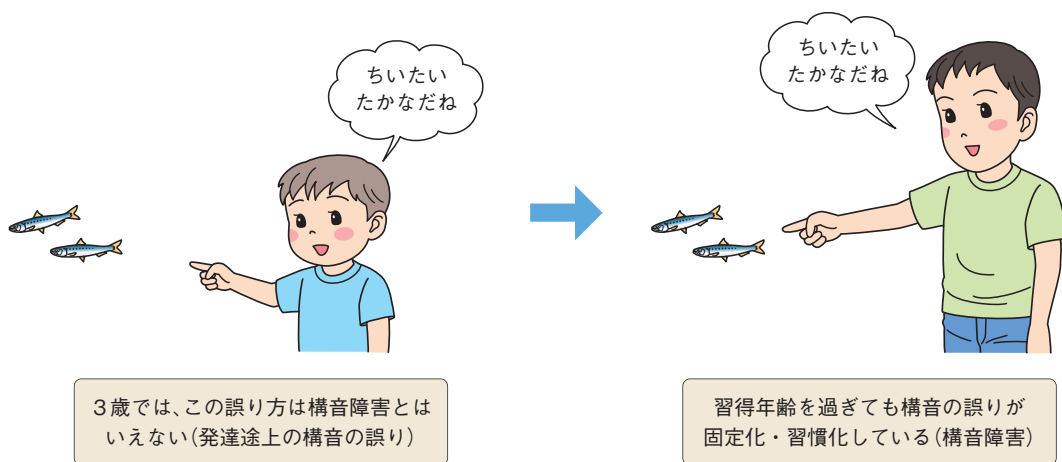


図2 発達途上の構音の誤りと構音障害